

地球時代の選択肢  
南アフリカに移住した家族  
舌村 稔・舌村峰子（南アフリカ・ダーバン在住）



## 第 62 回

# 袖振り合うも多生の縁

このことわざは、私の母が生前よく口にしていました。

母の解釈は、「どんな人とのご縁も粗末にはしてはいけない」だったように思います。

このことわざの意味を辞書で調べるとこう書かれています。

人との縁はすべて単なる偶然ではなく、深い因縁によって起こるものだから、どんな出会いも大切にしなければならないという仏教的な教えに基づく。

「多生」とは、六道を輪廻して何度も生まれ変わるという意味。

「多生の縁」は、前世で結ばれた因縁のこと。

「袖振り合うも他生の縁」とも書く。

「袖擦り合う（擦れ合う・触れ合う）のも多生の縁」ともいう。

『上方（京都）いろはかるた』『尾張（大阪）いろはかるた』の一つ。（袖の振り合わせも他生の縁）

出典：故事ことわざ辞典 <http://kotowaza-allguide.com/so/sodefuriaumo.html>

「どんな人との出会いも深い因縁によっておこるもの」はこれまでの私を様々な形で励ましてくれました。

故ベバリー・ネイスさん。彼女は米国の私のホストファミリーの母でした。

ベバリーは、私が都立高校を卒業し米国の語学留学先に選んだオレゴン州ポートランドにある Lewis and Clark College という大学で留学生たちに米国の家族の生活を知ってもらう、というプログラムに参加していたのです。

語学留学、学部入学、卒業、そして東海岸の大学院に進んだ私を本当の娘のように彼女と彼女の家族は受け入れてくれました。米国を離れた後もその交流は続き、私たちの結婚式には彼女と夫のジョージも参加してくれました。もちろん、彼らの子どもたちも私の弟、妹となっており、それぞれの結婚式やお祝いには世界のどこからも駆けつけました。

残念ながら彼女の晩年はパーキンソン病との闘いでした。最晩年の数年間は、私も毎年彼女を訪れ、彼女の好きだった日本食を作り昔話に花を咲かせました。

最後まで明るくユーモア一杯だったベバリーは 2020 年 5 月に永眠しました。コロナ渦ゆえお葬式に参列できたのは家族 10 名のみ。美味しい食事を大勢で囲むことが好きだった彼女にとって、これは悲しいお別れでした。

そして、2022 年 6 月のある日、ベバリーの夫、ジョージから突然の電話で「来月 7 月 30 日にベバリーのお別れの会をするから出席して欲しい」と乞われました。

これは、「万障繰り合わせて」出席する意義があると思い、そこからスケジュールの調整に入り、チケットの手配をし、慌ただしく米国へ出発したのです。

彼女との思い出は彼女が永眠した際に文章に書き残してありました。今回、集まった人たちの前でこの文章を読むことができたことが嬉しかったです。

+++++

ベバリー、彼女は誰よりも私を理解してくれた。

私は英語で言えたのは自分の名前と出身地だけ。

でも、彼女は私を理解してくれた。

英語を勉強して大学に行くためにオレゴン州ポートランドに降り立った高校を卒業したばかりの日本人の女の子。

彼女たち家族が住む家は木々に囲まれた瀟洒な住宅地にある高い天井のある大きなお屋敷だった。

私が見たことのないような美しいキッチンに、食器洗浄機、2 階建てのオーブン、日本の 3 倍はある電子レンジ、ジュースメーカー、スタンドミキサー、などなど最新の機器が揃っていた。

彼女が毎日そのキッチンで家族のために作る料理の多くは、初めて見る、嗅ぐ、食べるものが多かった。



曾孫のグリフィンと一緒に (2015 年)

でも、それは決して難しい料理や複雑な料理ではなかった。しかも、彼女は時々、料理をしながらお酒も楽しんでいた。

彼女の作る料理はすべて、彼女の知性と、良質の肉や魚、野菜との組み合わせだった。

私は全部を美味しく食べ、毎食後、満腹感と満足感でいつも満面の笑みだった。

勉強が大変になって、本当に追い詰められたとき、私は彼女の料理を乞い、食卓に寄せてもらった。

彼女は私がなにも言わなくても私を理解してくれていた。

米国での成人を祝う 21 歳のお誕生日に、彼女たち夫妻の親しい友人たちと大勢で日本食レストランに連れて行ってくれた。

大人になった私に渡されたドライマティーニ。

彼らほどには楽しめなかったけれど、大人たちに交じって飲んだドライマティーニはアルコールが爽やかで一口飲んだだけで一挙に大人の階段を上る思いだった。

困難な状況に陥ったとき、私は不平を言い、泣き言を彼女に言った。

彼女は話を聞いてくれて、「大丈夫」と言った。あなたなら乗り越えられると。

家族で南アフリカに移住した時も、夫が不慮の事故で亡くなった後も、私は子どもたちとそれでも南アフリカに残る、と言ったとき、

「大丈夫、分かってる。あなたなら乗り切れる」と誰よりも先に励ましてくれた。

私は彼女の最晩年、コロナ渦前、ダーバンからポートランドまで 36 時間かけて、彼女たちに料理を作るためだけに、自分の包丁と料理用の箸をスーツケースに包んで年一回の 2 週間の親孝行をしていた。

毎回、彼女は余計な躊躇なく、「トンカツを作って！」とにっこり。

娘翔子の婚約者には、「ようこそ、もう家族よ！」と言って迎えてくれた。

時を変え、場所を変え、どんな時でも「あなたならなんでもできる」といつってくれる人がいたから、私は世界のどんな場所でもどんな困難とでも正面から戦っていけると思っていた。

「あなたは何でもできるのよ」という信頼がどれだけ私を励ましてくれただろう。

彼女の全幅の信頼があったからこそ、今の私があるのだと思う。

いま、不思議なめぐりあわせで、私のビジネスにもなっている日本食をベースにしたお弁当の仕事にも彼女のレシピは頻繁に登場する。日本食ベースとはいえ、美味しいものに国境はない。



車いすに乗りながらも冷蔵庫を整理しようとしているペバリー（2019年10月）

なぜなら、そのレシピは気難しくなく、料理をすることへの、そして食べてくれる人のことを思うシンプルな喜びに満ちているから。

彼女はきっと空の上でかつてのように料理を始めているはずだ。

親しかった人たちがたくさんそこには集まっているはず。私の両親もきっとそのテーブルにちょこんとにこにこしながら座っているはずだ。

彼女の地元誌に載った訃報には、彼女の家族として、夫のジョージや子どもたちの名前のあとに続いて「日本人の娘・峰子」という表記があった。

私はこの表記にこそ、私の現在が存在する、と思っている。

+++++



車ジョージと一緒にパームスプリングの  
ゴルフ場内にある別宅で (2017年)

「袖すりあうも他生の縁」によって、ベバリーに出会い、その家族が私の米国の家族となり、私の子どもたちにもつながっている現在があります。

どんな出会いにも必然性がある、ということのをこれほどまで教えてもらった人は他にいません。